

2 指導の実際

指導の実際と言っても、実はとりわけて言うべきことは何もないのです。第一節の二つの基本原則を守ってやっていくだけで、今までとは比較にならぬ成果が収められるのです。指導の技術とかコツといったものは、あるのに越したことはありませんが、なくても、この二つさえ実行すれば、それでうんと効果が上るのです。ただそう言いましても、それだけでは実際に指導する場合、心もとないとも思いますので、主な汗意事項をここにまとめてみることにします。

(1) 教材について

現在ある教科書を使用するより仕方がありません。その教科書に使用されている言葉で、当用漢字で表記できる言葉があったら、それを漢字に全部書き改めて、それを子供たちに使わせるのです。私は、今、第三次の実験中にありますが、一年生の最初から、当用漢字で書き表せる言葉は、一つの例外もなく漢字を用いて表記しています。そればかりか、一つの試みとして、当用漢字表にない漢字も出してみました。読みに関するかぎり、少しも困難を感じておらないようです。例えば、「電」を提出するに関連させて「雷」を、「掃く」に関連させて「箒」を提出してみました。これら一字だけを覚えるより、二字合せて覚えた方が、やはりやさしいらしく見えました。

一年生の入門期教科書

入門期の国語教科書は、絵ばかりでほとんど字がありません。しかし、この絵の中に、漢字をはりつけておくようにしますと、その漢字を

よく覚えます。例えば、学校の絵に「学校」、犬の絵に「犬」、その他「山」「鳥」「花」「畑」「子供」「男の子」等の小さな漢字カードを印刷してやり、教科書にはらせるのです。図画・工作の時間にはらせたらよいと思います。最初、漢字カードを切り取らせて、机の上に並べさせます。次に、黒板に、「犬」と大きく書いて、それと同じカードを拾わせ、それを教科書の犬の絵のわきにはらせます。こんな作業の間に相当数の漢字が読めるようになります。

その他の教科書

できたら、どんな教科書でも、国語の教科書に準じて、漢字に書き改めたり、小さい漢字カードを絵のわきにはりつけさせます。子供たちにはらせますと、最初はなかなかかはかどりませんが、慣れて来ますと、驚くほどじょうずにはるようになります。

プリント

一度学習した漢字は、できるだけ子供の目にふれるような機会を、多く作ってやるのが有効です。私は、そういう漢字を使用して、短いお話や物語、なぞなぞ、ニュース等を印刷して、子供たちに与えました。

(2) 指導について

漢字の指導は、提出された最初の機会に必ず行うべきものと固く考えないことがまず必要だと思います。正書法的な方法を取りますと、どうしてもむずかしい漢字も提出しないわけにはいきません。かと言って、それをかな書きして、正書法的な用法を破ることは絶対に良くありませんので、漢字で提出して、簡単に説明しただけで済ませてお

くのです。実際の指導例によって、説明したいと思います。

予防注射

みんなで並んで衛生室へ行きました。予防注射をするのです。内田先生が「良い子は痛くありませんよ」とおっしゃいました。みんなきちんと並んで、番の来るのを待っています。とうとう僕の番になりました。僕は胸がどきどきして来ました。目をつむって手を出しました。ちょっとちくっとしたら、もう予防注射は終わっていました。「良かったね。これで病気にかからなくなるよ」と、石井先生がおっしゃいました。

これは、一年生の、入学後二、三か月たった頃の社会科の教材です。この文の新出文字は「、」の付いた九つの漢字です。「、」の付いたのは、教育漢字でない当用漢字で、「」の付いたのは、当用漢字表にもない漢字です。この教材は、第二時間目以後に使います。第一時間目は、「予防注射」と黒板に大きく文字を書いて、一時間かかってその話をします。その話の中で、「予防」の意表も、「注射」の説明もしますが、その言葉の意義や文字の読み方を、この一時間で理解できるようにしようとは、決して考えません。それは、例えば、「予」にしても、「天気予報」とか、「来月の予定」とか、数多くの他の言葉に接するようになれば、自然にその意義が理解できると考えるからです。それまで、あせらずに待つのです。

第二時間目に、このプリントを子供たちに配ります。私は、前の時間の「予防注射」という字の読みなど、子供たちに決して期待してはいませんが、このプリントを手にした子供たちは、あちこちで、「予防注射」と読んでいます。さて、これを子供たちに読ませるのですが、この程度の文は、五、六月頃ともなりますと、いきなり読ませても、二割くらいの子供は、ほとんどつかえずに、すらすらと読みます。そういう子供に読ませるか、または斉読をさせます。

「、」の付いている新出漢字の所で、つかえますから、その時は教えてやります。「待」という字など、前後の関係で判読する子が何人かいるはずですが、その他の新出漢字も、時間の余裕さえあれば、つかえた所で教えないで、子供たちに考えさせますと、喜んで判読を試みますが、前後の関係から、結構正しく読むものです。これも指導上、有効なことだと思います。

新出漢字中、「衛・痛・胸」等は、誰も習得してくれなくても良いつもりで提出したものです。それらの漢字は、文字としては初めて見るものでありますが、言葉としてはよく理解しているものです。ですから、読みさえ指導すればそれで済むわけですが、これらの漢字は、今どうしても習得しなければ困るという漢字でもありませんので、さっと軽く扱って次に進めた方がよいのです。

ここで疑問を持たれる方がいるのではないかと思います。「そんなに、学習させないでも良いと思うような漢字をなぜ提出するのか」という……。それは、「その漢字を今指導する必要はないのだが、その言葉を使用する必要があったから、自然その漢字も使用せざるを得なかったのである」というのがその理由です。つまり、言葉を使えば、正

書法的用法に従って、漢字をも使用しないわけには行かないのです。と同時に、むずかしい漢字ほど、早くから子供の目に触れさせて、その文字に対する認知力が徐々について行くように、配慮してやる必要があることなのです。教師が特に指導をしなくても、また、子供たちも意識的にその漢字を覚えようとしなくても、提出され、一度でも読んだ以上、子供たちの能力に応じて、何かの形で心のどこかに残るものだと思います。決して、何の影響もないという言葉はないと思います。決して無駄ではないと思います。例えば、「衛生室」という言葉を、次の時間に提出して、誰も読めなかったとしても、「この字は、『予防注射』の文に出た字だよ」とヒントを与えたり、あるいは「えいせいしつか、きゅうしょくしつか、しょくいんしつか」と質問してその一つを選ばせるかした場合、「えいせいしつです」と答えられるかも知れません。もし、答えられたら、それだけでも、無駄ではなかったこととなります。

前にも述べたことですが、「何回練習させたら、必ず習得させてしまいたい」という考えは、教師の熱意としては肯定できても、考え方として誤っていると思います。まして、一般に考えられているような「初めて提出したその時に、習得をねらう」漢字指導は、実に愚かなことと言わなければなりません。教師自身も大変なことですし、子供たちにとっても、こんなに追いつめられた学習では、かわいそうです。これに反して、私の指導は、漢字こそたくさん、しかもむずかしそうなものが、数多く提出されますが、指導者も子供たちも、いつまでに習得させ、いつまでに習得しなければならぬと、考えていませんから、学習に少しの負担も感じていません。「ひとりで習得できる」まで、何回でも反復提出されますし、習得できた後までも、また繰り返し提出さ

れるのです。つまり、「漢字が読めないのは、提出の回数が足りないため、子供が悪いのでも誰が悪いのでもない」という考えなのです。

以上で、「衛・痛・胸」等の漢字を、誰も習得してくれなくてもよい、というつもりで提出したわけが、おわかりいただけたと思いますが、理由はまだ外にもあるのです。それは、ここで「衛生室」ということばを学習することは、すでに学習した、「先生の生」「教室の室」を復習する良い機会だということです。「先生」なら、よく読める子でも、「生」だけでは、「『せん』だったかな、『せい』だったかな」と迷う子は多いものです。中には、「先生」では、ちゃんと読めるのですが、「生」だけだと、全然わからない子もいるのです。「先生」という字に用いられている字ということさえ気がつかないのです。ですから、「生」や「室」を、別の言葉の中で学習することは、その字に対する認知力を深める上には、とても有意義なことなのです。

一体、文字に対する認識というものは、一遍に深く、正確なものに到達できるものではありません。自転車に乗れるためには、せいてはいけないように、たといそれが可能であるとしても、急がず、徐々に力をつけて行くことが良いと思います。「あんまり早くじょうずになったのでは、おもしろくない」くらいの気持が大切だと思うのです。「先」と「生」と、どちらが「せん」でどちらが「せい」かわからないが、どちらかであることだけはわかる、という程度の認知力でも、結構役に立つのですから、×を付けるだけでなくほめてやりたいものです。事実、認識というものは、徐々に深まっていくものですから、誰だって、必ず、

こういう段階を通過しているはずですが、もし、×を付けて叱るというならば、それは子供に対してではなく、認識をそこまで深めるに十分なだけの「提出回数」が足りなかったことに対して責任のある教師の方でしょう。

このように、子供たちが、どんなに覚えまいとしても、どうしても覚えてしまうまで漢字を反復提出するのですから、私の指導する一年生が、よその学校の六年生より、漢字の習得率の良いのがあたりまえでしょう。しかし、覚えるまでの反復回数というものは、実際にはそんなに多くを要するものではありません。

次に、新出文字について、どんな指導を、どの程度にするかをお話しましょう。

「予防注射」「衛生室」は、事実即して理解させるだけに止めます。ただし、「生」と「室」とは、「先生」「教室」に関連させ、殊に「室」は「へや」の意味であることを理解させます。そのため、「家」と関連させて「宀」が「屋根」であり、「家のしるし」であることが理解できていなければなりません(この指導は、私の場合はすでに済んでいました)。

「待つ」は、すでに学習した「持つ」と比較させます。旁が同じで、「手にもつ」のが「扌」の「持」。「道(彳は道のしるし、行の原形が 亍 で、道の象形であることは、すでに学習させてあります)でまつ」のが、「彳」の「待」と、理解させます。

「胸」は、扁の「月」に注意させておきます。「背」「腹」「腰」等の字が提出されたら、その時に「月」の意味を知らせますが、ここではまだ「ここに皆さんの知っている、お月様の『つき』という字がありますね。どう

して『胸』に『お月様』があるんでしょうね」くらいにしておきます。

「痛い」「病気」は、「痛」と「病」の「疒」に注意させます。「疒」は「𠂔」で、「人が病気で寝ているしるし」であることを教えます。「気」は、すでに学習した「天気」や「元気」の「氣」ですから、それに気づかせます。理科ですぐ「風」について学習しました。この時「空気」という字を指導しましたが、これらを合せて、「気」は「𠂔」で、「湯から蒸気が上っていくようすを表したしるし」であることを教え、「目に見えないもの」「見えないが何か力や働きのあるもの」に使われる字であることを教えました。

私は、こんなことまで説明してやっていますが、これはどうでも良いことです。現在、私は一組を、二組は菊池先生が指導していますが、教材はまったく同じで、指導は少し違うようです。つまり、私は、文字を分解し、字源を説明していますが、菊池先生は全体として、言葉として指導しています。

結果は大体同じです。漢字の知識は、豊富にあるに越したことはありませんが、教師の必要条件ではありません。成功の鍵は、私の基本原則を行うこと、習得するまで反復提出してやること、この二つだけにあるのです。